〈幼稚園教育〉

食べる喜びや楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫

～身近な野菜の栽培活動を通して～

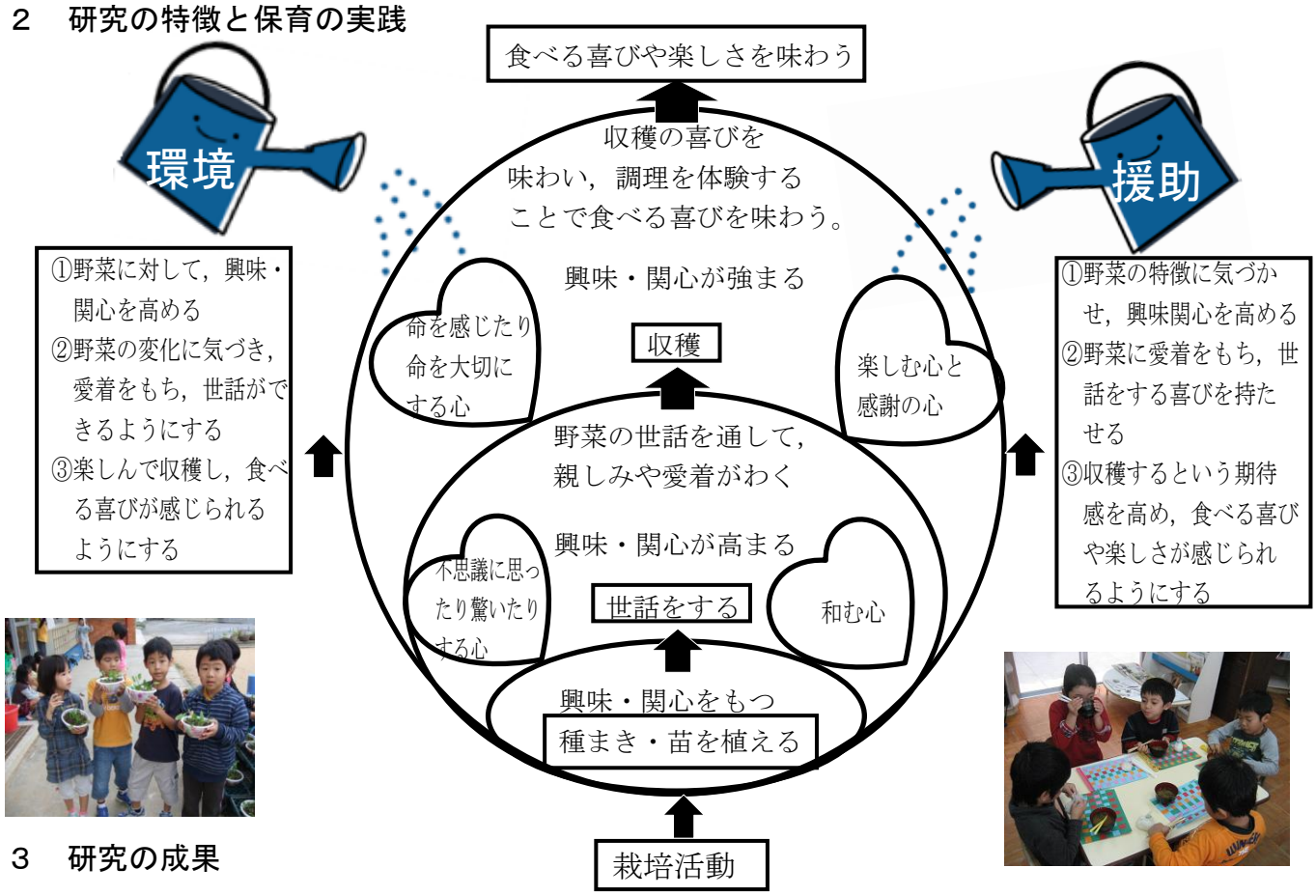
豊見城市立とよみ幼稚園教諭　　**中　本　勝　子**

1　研究テーマについて

これまでの保育を振り返ると，教師や友達と楽しく食べる雰囲気づくりや，食べる喜びが感じられるような環境構成や援助が不足していたことを反省する。

そこで，食への関心を高め，自ら進んで食べようとする気持ちを育てるためには，栽培活動が有効ではないかと考えた。栽培活動に取り組むことで，子どもが，自ら野菜を育て，収穫し，調理する体験を通して，教師や友達と食べる喜びや楽しさを味わうことができるのではないかと思い，本テーマを設定した。

2　研究の特徴と保育の実践



3　研究の成果

{1} 身近な野菜を育て、野菜の変化に気づくことで、野菜への興味・関心や食べることへの意欲を高めることができた。

{2} 自分で育てた野菜を収穫し、調理するという体験が、幼児の心を揺り動かし食べる喜びや楽しさを味わわせることができた。

{3} 栽培・収穫・調理の過程における幼児の心の動きをとらえた環境構成と援助の工夫が、幼児の食べる喜びや楽しさにつながった。

＜幼稚園教育＞

食べる喜びや楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫

～身近な野菜の栽培活動を通して～

豊見城市立とよみ幼稚園教諭　　中　本　勝　子

Ⅰ　テーマ設定の理由

平成 17 年に制定された食育基本法において、「食育」とは、「生きる上での基本であって、知育、徳育、及び体育の基礎となるべきもの」とした上で、特に子ども達に対する食育については「心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性を育んでいく基礎となるもの」と明示されている。

また、平成 20 年に告示された「幼稚園教育要領」で初めて「食育」という言葉が使われ、「健康」領域の「内容の取り扱い」で「健康な心と身体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への関心を持ったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」と記された。

近年、食を取り巻く環境の変化は、子ども達の健全な心身の成長に影を落としている。６つの「こ食」に代表されるように、一人で食べる「孤食」、家族がばらばらのものを食べる「個食」、自分の好きな決まったものしか食べない「固食」、食べる意欲がなく食べる量が少ない「小（少）食」、パンやパスタなどの小麦粉を使った主食に偏る「粉食」、味の濃いものを好んで食べる「濃食」などが問題となっている。

本園の実態をみてみると、子ども達の中には、朝機嫌が悪い、ぼんやりして生気がない、集中して遊ぼうとしないなど、気になる姿がみられる。食事の面においては、偏食がある、咀嚼力が弱い、ダラダラ食べが目立ち食事に集中できない、行儀が良くない、こ食するなど、気になる食生活が生じていることが窺え、「食」に関して難しさを感じていたところである。

しかし、これまでの保育を振り返ってみると、食べる喜びが感じられるような環境構成や援助になっていたか、子どもが喜びや楽しみを感じるような体験活動ができていたか、教師や友達と楽しく食べる雰囲気づくりができていたか、また、偏食指導やマナー指導の方向に向いていたのではないかと反省することが多い。

そこで、食への関心を育て、自ら進んで食べようとする気持ちを育てるためには、栽培活動が有効であろうと思い、栽培活動に取り組んでみたいと考えた。そして、子ども達が自ら野菜を育て、収穫し、食べる体験を通して、教師や友達と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりすることで、健康な心と身体が育ち、子ども達が進んで食べようとする気持ちが育つのではないかと思い、本テーマを設定した。野菜に興味・関心をもたせるための工夫、感動する体験をさせるための栽培活動のあり方を探りたい。

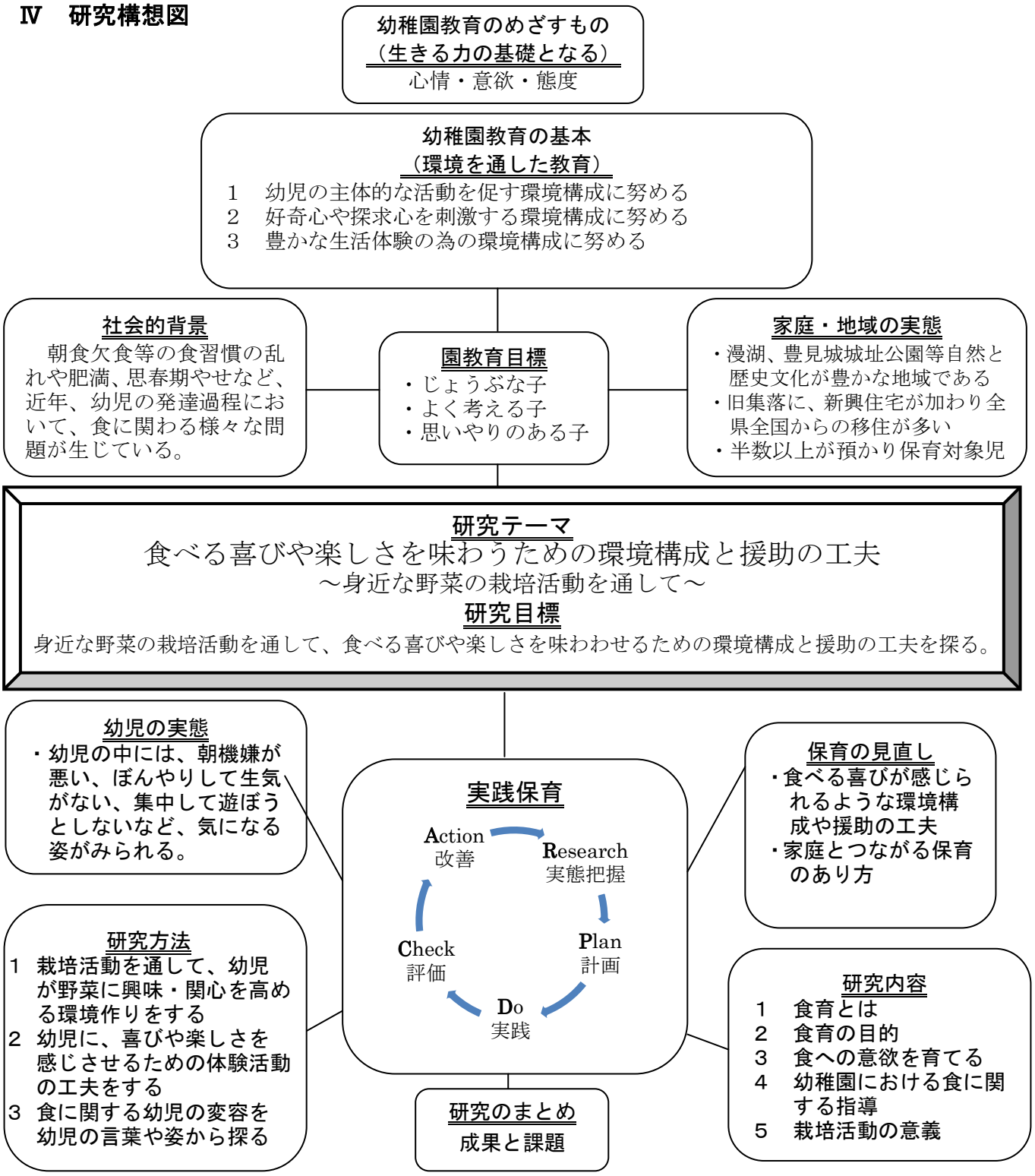
Ⅱ　研究目標

身近な野菜の栽培活動を通して、食べる喜びや楽しさを味わわせるための環境構成と援助の工夫を探る。

Ⅲ　研究の方法

(1) 栽培活動を通して、幼児が野菜に興味・関心を高める環境作りを工夫する
(2) 幼児に、喜びや楽しさを感じさせるための体験活動の工夫をする
(3) 食に関する幼児の変容を、幼児の言葉や姿から探る

Ⅳ　研究構想図



Ⅴ　研究内容

１　食育とは

平成 17 年 6 月に「食育基本法」が制定され、その食育基本法の中では、「食育」を次のように位置付けている。

・生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの
・様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間をそだてること

２　食育の目的

⑴ 心と人間性を育てること
⑵ 健康な体のしくみを育てること
⑶ 食の知識を増やし、食べるために必要な技術や食べ物を選ぶ能力をそだてること

３　「食」への意欲を育てる

⑴ 幼稚園における「食育」

幼稚園の「食」は成長発達に必要な栄養を摂取するという意味と、その後の食習慣の基礎となるという意味において極めて重要である。幼児期の食体験は「食の原風景」となって、生涯にわたってその人の食習慣の基盤となる。そして長じて世代間連鎖を起こし、次世代の食生活へと影響を及ぼす。食習慣の基本は家庭で形成されることは自明であるが、幼稚園における食育への期待は高まっている。では、幼稚園の「食」の特徴とは何か。それは家族以外の「みんなと食べる」ことである。

⑵ みんなで食べることを楽しむ

「食べることを楽しむ」ことは、生理的な意味と社会的・心理的意味がある。「楽しい」「美味しい」と感じることで食が進み、成長に必要な栄養が摂取される。しかし、人はただ栄養を摂取するためだけに食べるのではない。「食べる」という行為は極めて社会的・文化的行為である。身近な環境としての食に関心をもったり、人と食を共にすることを楽しいと感じたりすることは、私達が社会で生きていく上で必要な力である。そのために幼児期から「他者と一緒に食べることは楽しい」という快感情の蓄積が大切となる。

⑶　生活リズムを整える

幼児の生活習慣を考える際に「睡眠」「食事」「日中の活動」の三つは切り離せない要素である。「食」の問題だけを取り上げることは意味がない。「睡眠」「食」「日中の活動」は三位一体である。「食育」といって「食」だけを取り出すのではなく、生活リズム全体を見直すべきで、中でも「日中の活動」の見直しは、幼児の食への積極的姿勢を育むことを大切にしたい。

⑷　食の場面を楽しむための工夫

本気で、食育に取り組もうすれば、生活を通した教育とは何かという根本を見直さなければならない。しかし、実際はそうはいかないのが現実である。机を食卓らしくセッティングしたり、和やかな雰囲気作りのためにお花を飾ったり、できるところからの工夫から始めたい。

⑸「食べ物」や「食べること」への関心を高める活動

食への関心を高めるには、自分の口に入るものを自分達で育てる活動が有効である。実際、自分達で育てた野菜は苦手なものでも美味しく感じ、大切に扱おうとする。簡単な調理活動に一部かか

わることによって、食に対する関心や意欲がより高まる。この場合「育てる」というプロセスに意味がある。

4　幼稚園における食に関する指導

(1) 食べることを楽しむ指導

幼稚園では、一人一人の幼児が、教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で、楽しい生活を展開することや自己を十分に発揮して、のびのびと行動することを通して、充実感や満足感を味わうことを大切にしている。食に関する指導においても、最も大切なことは、教師や友達と食べる喜びや楽しさを育むことである。幼児は、十分に体を動かして遊び、空腹感を感じ、食べることで、満足感を心と体で味わうのである。そのためには、食べる際の環境の工夫、和やかな雰囲気づくりをすることが必要である。また、幼稚園においては、季節ならではの伝統行事や誕生会などのお祝いの会に、ふさわしい食べ物を食べることもある。みんなで同じ物を食す楽しさ、うれしさを感じる体験を積み重ねていくことも大切である。

(2) 食べ物への興味や関心をもつ指導

幼児は、食べ物が口に入るまでの過程において、その食べ物になんらかの形で関わると、「食べたい」と言う気持ちを強くもつものである。例えば、自分で野菜を育てる中で、親しみを感じ、生長と共に愛着をもち、収穫を楽しみに待つようになる。収穫したばかりの旬の野菜そのものを味わい、香り、色など、買った食物との違いに出合う。時には、「苦い」「渋い」などの今まで味わったことのない味に驚きながらも、様々な味覚を実感する。収穫物を教師や友達と一緒に簡単な調理をしたり、その手伝いをしたりする中で、ますます、興味や関心が強くなり、食べてみたいという思いをもつ。友達の食べる様子、食物への関心のもち方などに刺激され、自分も食べてみようとしたり、自分の食べ物へのとらえ方を広げたりもする。さらに、友達だけではなく、様々な人との関わりが広がっていく中で、保護者や地域の人々、栽培に関わる農家や専門家等との交流を通して、人に対する思いや感謝の気持ちをもち、食物への思い入れを強くし、食物を大切にしようとする気持ちも生まれてくる。こうしたことから、栽培活動や収穫、そして収穫物を食すなどの体験を大事にしている。

(3) 進んで食べようとする気持ちを育てる指導

食べることの楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりすることで、「自ら進んで食べようとする気持ち」が育つようにする過程が大切である。偏食や食事のマナー等の指導は、この姿があってのことであることを忘れてはならない。なお、食生活の基本は、家庭で育まれることから家庭との連携が必要である。特に、近年、食物アレルギーをもつ幼児が増加してきた状況を踏まえ、家庭から必要な情報を得て、幼稚園で食す物に十分配慮する必要がある。食物そのものへの配慮はもちろんのこと、同じ物を食べる活動を取り入れる場合、その幼児もその体験を楽しいと感じられるようにすることが大切である。

5　栽培活動の意義

幼稚園でいろいろな野菜を子どもと共に栽培する活動は、心を豊かにするとても楽しい活動である。しかし、自然と触れ合い、その中で驚きや感動など心を揺り動かす体験をする機会は減少しつつある。このようなことからも、幼稚園で、命を育てる栽培活動を行うことはきわめて貴重で、大きな意義がある。幼稚園における栽培活動の意義を次のようにまとめてみた。

(1) 野菜を育てることにより、いろいろな野菜に興味・関心をもつ。
(2) 野菜の特徴（色・形・香り・開花・結実など）を知ることで、興味・関心が高まり食べてみたいという気持ちをもつ。

(3) 野菜の生長を通して、不思議に思ったり驚いたりする心が育つ。
(4) 生きている野菜の生命力に触れることにより、野菜を大切にしようとする心が育つ。
(5) 野菜の世話を通して、親しみや愛着がわき生長の喜びを味わう。
(6) 収穫の喜びを味わい、調理を体験することを通し、食べる喜びを味わう。

Ⅵ　研究の実際

幼児が幼稚園生活の中で、栽培活動を通して、食べる喜びや楽しさを味わうための環境構成と援助を工夫し、２回の保育実践を行い、改善を行う。

1　検証保育（1 回目　11 月）「野菜を育てよう」

(1) 設定理由

種蒔き、苗の植え付け、水やり、収穫など一連の作業が、愛着をもち親しみをもってできるような環境構成や援助の工夫を行い、これまで育ててきたネギを収穫する際には、楽しんで収穫するための環境構成と収穫するという期待感を高めるための援助を行う。

(2) 保育のねらい

・野菜の世話を通して、野菜に興味・関心をもち収穫の喜びを味わう。

(3) 検証のねらい

・栽培活動を通して、野菜に興味・関心をもち、自分で育てた野菜に愛着をもち、収穫することに喜びが感じられるような援助をする。

(4) 環境の工夫の視点

・楽しく栽培活動に取り組むための環境の工夫。
・栽培物の変化を感じたり世話をしやすくするための環境の工夫。
・世話をしながら自然に興味・関心が出てくるようにするための環境の工夫。
・楽しんで収穫するための環境の工夫。

(5) 教師の援助の視点

・野菜の特徴に気づかせ、興味・関心をもたせるための援助。
・野菜を育てることを通して、親しみや愛着をもたせるための援助。
・収穫するという期待感を高めるための援助。

(6) 実践経過

月日	幼児の体験活動	検証のねらい	○環境構成　★援助の工夫	実際の幼児の姿	検証結果
10月25日(火)	◎野菜の苗を植える。 ・キャベツ ・レタス ・アップルピーマン ◎ネギに水やりする。	・いろいろな野菜の苗を植えることで、野菜の名前や特徴に興味を持ち、育てたいという気持ちをもたせる。	○馴染みのある野菜の苗と珍しい野菜の苗を用意する。植えた後で、野菜のネームプレートをつける。 ★野菜の苗を見せ、「触ってみてどう？」「形はどうなの？」「色はどうなの？」「匂いはどうなの？」など野菜の特徴に興味をもち、植えてみたい、育ててみたい気持	・「これは、アップルピーマンよ。アップルってわかる？」と聞いてみたら「うん、わかるよ、りんごでしょ」とすぐに答える子ども達。「アップルはりんごだから、もしかして、りんごのような味がするのかな？それとも、りんごのような形かな？楽しみ…」という会話を楽しんだら、興味・関心をもち、	・アップルピーマンという珍しい苗に、興味・関心が高まったようである。また、キャベツやレタスは「あーっ食べたことがある」とお家で食べた野菜と重なって、より野菜に興味をもつことができ、植えてみたい、育ててみたいという

			ちになるような援助を行う。	植える姿がみられた。	気持ちになったようだ。
11月7日(月)	◎野菜の世話をする。 	・世話をしている野菜の変化に気づき、世話をする喜びを味わわせる。	★水やりを忘れるとどうなるかなーと世話することの大切さに気づかせる声かけをする。 ★植物とかかわることで、生長の変化に気づいた子の姿を捉え、その気づきに教師が共感し、それを他児にも伝えていく。	・野菜についているネームプレートを見ながら「これはキャベツだよね」「これはアップルピーマン」とか、「やさしくかけてあげないと倒れるよー」「いっぱいかけたら、枯れるよー」などと友達と話しながら水やりする姿が見られた。	・「早く大きくなってね」と野菜に声をかけながら、愛おしそうに水やりしている姿や、友達との会話を楽しみながら世話をする姿から、育てたいという気持ちをもち、それに喜びを感じていると捉えた。
11月11日(金)	◎野菜の種を蒔く。 ・ほうれん草 ・二十日大根	・種を比べ合ったり、種の色や形等気づいたことを友達と話し合ったりしながら、友達と楽しんで種蒔きをさせる。	○発砲スチロールの丼容器に絵を描いた手作りの鉢に種蒔きをする。 ★いろいろな種があること小さな種にも命があることに気づかせるような援助を行う。 ★友達とかかわりをもち、種蒔きする楽しみを味わわせる援助を行う。	・種を見て「ちぃっちゃい」「かわいい」と言いながら、手の平の種を大事そうにする姿や愛しそうにする姿がみられた。 ・「これ（ほうれん草の種）ブルーだ　すごいなぁー」と友達と見せ合う姿がみられた。	・ほうれん草の種が青色であるのを見て、驚いた表情がみられ、感動を覚えたようである。気づいたことを、友達と伝えあうことで、感動する心を分かち合っていた。
11月15日(火)	◎ネギを収穫する 	・野菜に興味・関心をもち、自分のネギに愛着をもち、喜んで収穫できるようにする。	○収穫しやすい動線を考えて、ビニールシートを敷いておく。 ★ネギへの期待感を膨らませるために、これまでのことを振り返り話し合う。 ★自分の育てたネギを大切に扱い、友達と比べながらじっくりと関わる時間をとり、収穫の喜びを味わわせるような援助の工夫を行う。	・収穫時、どれから切ろうか、何本切ろうかと真剣な顔つきで考える姿がみられたり、一本ずつ丁寧に切ったり、まとめて一度に切ったりなどいろいろな姿がみられた。 ・自分の育てたネギを愛おしく思って、切る際に器からこぼれてしまったネギのひとつひとつを大切そうに拾っている姿があ	・各家庭から持って来たペットボトルにネギを植えたことで、「僕の（私の）ネギ」という愛着をもち、毎日水やりして大切に育てることで、喜んで収穫する姿に結びついたようである。 ・収穫する際、友達と会話を楽し

	・収穫したネギは、味噌汁を作って食べる			った。	み、お互いに育てた喜びを共有していた。

[幼児の変容]

・　苗を植え、世話をして、収穫するという一連の活動は、子どもにとって、野菜に対する愛着を感じ、「早く大きくなってくれないかな～」「早く大きくなってお料理に使いたいな～」と楽しんで世話をしている様子となって表れていた

・　ペットボトルでネギを栽培したことで、「自分のネギ」という愛着をもち、水やりして世話をするなかで、透明なペットボトルから見える土の様子や根っこのはり方にも興味・関心を示していた。

・　収穫の際、ネギの一本一本をじっくり見たり、考えたり友達と比べ合ったりする姿がみられた。これまで、世話をしてきた満足感を感じ、野菜のひとつひとつを丁寧に摘み取り、洗い、切り方にしても、ものすごく愛おしさを感じている様子がみられた。

[改善点]

・　収穫の喜びを味わわせるための環境構成としては、子どもが、落ち着いて収穫できる時間や場の設定が必要である。

・　収穫しながら子どもと会話を楽しみ、教師が子どもの心に寄り添い、温かい目で見守る援助の工夫をしていく。

２　検証保育（2 回目　12 月）「育てた野菜をみんなで食べよう」

⑴ 設定理由

１回目の検証保育を終えて、環境構成や援助の仕方で、子どもの感動が膨らむかどうかが決まってくるのだと分かった。そこで今回は、栽培活動を通して、自分で育てた野菜に愛着をもつことで「食べたい」という気持ちが起こり、教師や友達と一緒に収穫物で簡単な調理をする中で、ますます、興味・関心が強くなり「食べてみたい」という思いを起こさせるような環境構成や援助の工夫を行う。

⑵ 保育のねらい

・収穫の喜びを感じ、調理することを通して、友達と食べる喜びや楽しさを味わう。

⑶ 検証のねらい

・栽培活動を通して野菜に興味・関心をもち、自分で育てた野菜に愛着をもつことで、「食べたい」という気持ちが起こり、友達と一緒に食べる喜びや楽しさを味わうための援助をする。

⑷ 環境の工夫の視点

・野菜に対して興味・関心を高めるための工夫
・野菜の世話を通して、愛着がもてるようにするための環境の工夫
・収穫の喜びを味わわせるための環境の工夫
・食べる喜びが感じられるようにするための環境の工夫

⑸ 教師の援助の工夫の視点

・野菜に愛着をもち、世話をする喜びがもてるようにするための援助
・野菜を収穫・調理する過程において、五感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚）を刺激することを意識した援助
・収穫しながら会話を楽しみ、教師が子どもの心に寄り添い、温かく見守る援助
・収穫・調理するという一連の作業を通して、食べる喜びや期待をもたせるための援助

(6) 実践経過

月日	幼児の体験活動	検証のねらい	○環境構成　★援助の工夫	実際の幼児の姿	検証結果
11月30日(水)	◎イチゴの苗を植える。 	・子どもたちが大好きなイチゴを植えることで、ワクワク感を味わわせる。	○好奇心をもって栽培活動に取り組めるように、違う種類の苗を用意する。 ★イチゴの苗に手紙を添えて、子どもが見える場所に置いておく。「これはなあに？」と簡単なクイズ形式にしてイチゴを植えることに興味・関心をもたせるような援助をする。	・「今日、イチゴを植えるんでしょう」と期待する姿があった。 ・苗を選び、両手で大事そうにもち、苗を傷つけないように慎重に植えていた。植えた後も、しばらくイチゴの側にいて、花を見たり香りを嗅いだり、葉っぱを触ったり、水やりしたりと関わる姿がみられた。	・「イチゴ植えるの楽しい」「ピンクのお花可愛い」「白いお花も可愛い」「早くできないかなあ」「早くイチゴ食べたいね」の会話や笑顔いっぱいの表情から、ワクワク感をもって楽しんでいるのだと捉えた。
12月2日(金)	◎畑を耕す。 	・畑を耕すことで、畑への愛着が芽生え、畑の中の生き物や植物の根っこにまで興味・関心がもてるようにする。	○畑を耕す中で、植物の不思議さに気づき、疑問が沸いてきた時に、自分自身で解決していけるようにするため、図鑑などを準備しておく。 ★子ども達が耕しやすいように、硬いところは教師が予め耕しておく。	・ミミズを見つけて「大きい」「ちいさい」と比べ合ったり、最初は気持ち悪がっていた子が、友達が触って遊ぶ姿に刺激され、触る姿もみられた。 ・図鑑を見て、実物と見比べながら確かめ合う姿がみられた。	・土の感触を味わい自分達でできたという自信を得たことで、「自分の畑」という思いをもち、畑への愛着が持てたようである。 ・植物図鑑などを見て、ますます野菜に興味・関心が高まってきたのではないかと思われる。
12月5日(月)	◎野菜の世話をする。 ◎大根の種蒔きをする(育苗用のポットに種蒔きする)。	・野菜の世話をする中で、キャベツの葉っぱの青虫の存在に気づき、世話する大変さに気づかせる。	○大根は育苗用ポットに種蒔きする。 ★教師が、キャベツ畑の前で、青虫に気づいた子ども達に「青虫はキャベツが大好きで、美味しそうに食べているね。だけど、青虫がみんなの大事なキャベツを食べたらどうなるかね？」「大事なキャベツを守るためには、青虫は取らないといけないね」と世話をする大変さに気づけるような援助を行う。	・キャベツを見ている教師を見つけたR君K君S君の3人が、「先生、何しているの？」と寄ってきて、ジーっと見て「青虫だ」と、気づいた。最初は「あーっ、キャベツが食べられたら大変だ」と取り除いていたが、そのうち、見つけた青虫を手の平に乗せて遊び、遊んだ後は「お家に持って帰る」と大事そうにロッカーに入れる姿が見られた。	・野菜を育てる中で、まわりにいる生き物にも興味・関心を示し、世話をすることの大変さを知ったようだ。

12月14(水)・15日(木)	◎米袋に各自マジックで好きな絵を描く。 ◎米袋に土を入れ、大根の苗を植える。	・米袋に愛着を持たせることで、中の大根にまで愛着をもたせる。	○野菜への愛着をもたせる方法として、米袋を使う。 ★「米袋に絵を描いたら、中の大根がうれしくてどんどん大きくなるはずよ～」と楽しく描けるような声かけをし、大根の苗植えに興味をもつ援助をする。	・米袋に描かれた絵の中には、大根・ミニトマト・二十日大根など野菜の絵があった。 ・「大きくな～れ」と声かけしながら一人ずつ植える姿がみられた。	・米袋に絵を描くことで、その中に植える大根にまで愛着をもったような表情がみられた。
12月19日(月)	◎ランチョンマット（折り紙模様）を作る。	・手作りのランチョンマットを作ることで、明日の調理へ期待をもたせる。	○ランチョンマットを作るための、材料を用意する。 ★「ランチョンマットを作ったら、おにぎりはどこにおく？ほうれん草の味噌汁はどこがいいかな？」と、明日に期待感がもてるような援助をする。	・自分だけのオリジナルのランチョンマットに仕上がり、友達と見せ合ったりする姿がみられた。	・ランチョンマットを作ったことで、明日に期待している表情が見られた。

楽しく栽培活動に取り組み、興味・関心をもち愛着をもつための環境の工夫

米袋に植えた大根

ペットボトルに植えたネギ

発砲スチロールの丼容器に植えたほうれん草

透明な容器に入れた種の見本

育てた野菜の写真を撮り掲示

野菜の切れ端を使って水栽培

(7) 保育の展開　（本時）

幼児の姿	・花が咲き、実がつき、大きくなる様子等、栽培物の変化に気づきながら、水やりする姿が見られる。 ・キャベツについた青虫を見つけ、手のひらに乗せて遊んだり、お家に持ち帰る姿が見られる。		
ねらい	・収穫の喜びを感じ、調理し、友達と食べる喜びや楽しさを味わう。	内容	・育てたお米で、おにぎりを作る。 ・収穫したほうれん草で、味噌汁を作る。
時　間	○予想される幼児の活動	★教師の援助　　○環境構成	
8：30	○身支度を整える ・　頭巾・エプロンを着け、手をきれいに洗う。 ○　お米を洗う ・　お米を触ったり、洗ったり感触を楽しむことで、より親しみを感じ期待感を持つ（視覚・触覚・聴覚）。	★手洗いがきちんとできているかを確認し、衛生面には特に気を配る。 ★お米に触れ、感触を楽しませることで、自分達が植え育てたお米を、炊いて食べる期待へとつなげていく ★見た目、触り心地、といだ時の音等に気づける様な声かけをする。	
9：30	○ほうれん草を収穫する ・ほうれん草を、収穫する。 ・収穫する際には、どうやって取ったらいいか自分なりに考えたり、友達と教え合う姿もみられたりする。また、収穫した後で、お互いに見せ合い、比べ合うことで、気づくことも出てくる。 ・洗って、手で小さくちぎる。 ・ほうれん草の味噌汁を作るので、お鍋に入れる。	○収穫しやすい動線を考え、ビニールシートを敷いておく。 ★どのように育っているかを見て、野菜の生長に喜びが持てるような話しをする。 ★収穫した野菜の名称を確認し、どのような特徴のある野菜であるかを話す。見た目は？→色･形･大きさ等（視覚）どんな匂い？（嗅覚）触り心地は？→硬いか柔らかいのか等（触覚） ★「手でちぎる時の音は？（聴覚）」等と聞いてみる。 ★「ほうれん草の味」そのものを味わって食べる為、他の食材は使わず、ほうれん草だけの味噌汁にする。	
10：10	○オニギリを握る ・炊きたてのご飯の匂いを嗅ぐ（嗅覚） ・ラップにご飯を乗せ、クルクルとまいて丸いオニギリの形に握る。 ・頭巾・エプロンをはずす。	★「ご飯の味」を味わって食べる為、あえてシンプルにし、何も（ふりかけとか）つけないということにする。	
10：40	○みんなで楽しく食べる ・オニギリとほうれん草の味噌汁を食べる（味覚）	○楽しい雰囲気作り（手作りランチョンマット・癒しの音楽・お花を飾る等）をする。 ★教師も一緒に食べることにより、食べる喜びや楽しさを共有していく。	

☆　栽培活動を通して変容した幼児の事例

事例１＜野菜嫌いのＡさんの変容＞

発砲スチロールの丼容器に絵を描いて作った可愛い鉢に、ほうれん草の種蒔きをして大切に育ててきたＡさん、水やりする姿にも楽しそうな表情がみられた。いよいよ収穫の日、ほうれん草を愛おしそうに見つめるＡさん。根っこから引き抜く時は、葉っぱを傷つけないようにゆっくり慎重に、洗う時には１枚１枚丁寧に行っていた。洗い終わって席につき待っている間に、グループの友達と「ちょっと食べてみようか」ということになり、ほんの少し口に入れた。その時、食べられたことがとてもうれしかったようで、「ほうれん草食べてみたら、ネギの味がした」と、その感動をすぐに教師に伝えにきた。「すごいね～、Ａさんはほうれん草を生で食べてみたんだって、その味はネギのようだったそうよ」と話すと、得意そうで誇らしげなＡさんの姿があった。あちこちから、「ネギの味」「セロリだー」「パセリみた～い」との感想も聞こえてきて、気がつけば、多くの子が味見する姿がみられた。

教師の読み取り

Ａさんは、偏食があり、いつも最後まで残って食べている子である。野菜嫌いのＡさんが、生のほうれん草を食べたことは驚きである。手作りの鉢を作ったことで「世界にひとつしかない大切な私の鉢」という思い入れができ、中に植えたほうれん草にも愛おしさを感じて「大切に育ててきた私のほうれん草…だからきっとおいしいはず…食べてみたい」という気持ちになったのだろう。そして、食べてみたらネギの味がしたということは、これまでの経験を思い出しながら、味の比較をしていることが窺える。教師も味見をしてみたら、えぐみはなく、柔らかくて美味しく感じた。これがまさに、「旬の味」の美味しさであり、そこに、自分で育てたという気持ちが加わり、ひときわ美味しく感じたのであろう。

収穫・調理するという一連の作業を通して、食べる喜びや期待をもたせるための援助

収穫

収穫する時、葉を崩さないように丁寧につんでいた。

洗う

洗う時は真剣な表情で、やさしい手つきで洗う姿がみられた。

手でちぎる

手でちぎる時には、愛おしいような表情がみられた。

味噌汁を作る

お鍋に入れる時に「美味しそう」「早く食べたい」と期待している姿がみられた。

ほうれん草の味噌汁
と
おにぎり作り

バケツ稲作りで、大切に育ててきたお米でおにぎり作り。収穫量が少なかったため、市販のお米を足したが、「みんなで育てたお米が入っているから美味しい」と言って、喜んで食べる姿がみられた。

手作りのランチョンマットで、楽しい雰囲気作りができ、自分達で栽培した野菜を調理することで、食べる喜びや楽しさを味わっていた。

(8)　検証の結果

〔幼児の変容〕

・市販の鉢の他に、ペットボトル・発砲スチロールの丼容器・米袋等を使用し、絵を描かせる等の工夫をしたことで、植えた野菜へ愛着をもち、楽しんで栽培活動に取り組む様子がみられた。
・野菜に関する絵本や図鑑を揃えたことで、興味・関心が高まり、野菜の生長の変化に気づき、生長の喜びを共感し、愛着をもって世話する姿がみられた。
・教師や友達と一緒に調理することで、喜んで食べる姿がみられ、みんなで食べると美味しいという満足感を味わっているような表情がみられた。

〔改善点〕

・栽培活動を通して、感動する体験を共有し収穫の喜びを味わわせるようにしていくための環境の工夫と援助の工夫を行う。

Ⅶ　研究の成果と今後の課題

１　研究の成果

(1) 身近な野菜を育て、野菜の特徴や変化に気づくことで、野菜への興味・関心や食べることへの意欲を高めることができた。　（Ⅵ－１－(6)）

(2) 自分で育てた野菜を収穫し調理するという体験が、幼児の心を揺り動かし食べる喜びや楽しさを味わわせることができた。　（Ⅵ－２－(6)）

(3) 栽培・収穫・調理の過程における幼児の心の動きをとらえた環境構成と援助の工夫が、幼児の食べる喜びや楽しさにつながった。　（Ⅵ－２－(6)）

２　今後の課題

(1) 「食に関する指導」の指導計画への位置づけと見直しの工夫。

(2) 家庭と連携した栽培活動の実践。

《主な参考文献》

文部科学省	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館	2008 年
無藤　隆　編著	『新幼稚園教育要領　ポイントと教育活動』	東洋館出版社	2010 年
無藤隆　柴崎正行編	『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』	ミネルヴァ書房	2009 年
砂田　登志子著	『今こそ食育を！元気をつくる選食・食選』	法研	2000 年
大澤　力　編著	『地球がよろこぶ　食の保育』	フレーベル館	2008 年
森上史郎　柏女霊峰編	『保育用語辞典』　第６版	ミネルヴァ書房	2011 年